

第2回大賞(金の星賞)受賞作品

「夢の羽～僕たちの約束～」

岡山県立津山高等学校三年 藤原歎子



賢治のまちから
高校生★童話大賞



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『夢の羽　く僕たちの約束く』

岡山県立津山高等学校三年　藤原歆子

空を見上げると、僕は、いつもあいつの姿を探してしまう。今にも、僕の前に出てきそうな気がするから。

僕に、夢を与えてくれたあいつに、もう一度会いたくて、今の僕を見て欲しくて…。

僕が、ソラに出会ったのは、小学三年生の夏休み。

病院の屋上で、ベンチに横になって、夏の青い空を、ぼんやりと眺めていたんだ。

そうしているうちに、眠たくなってきた、つい、寝てしまったんだ。気がつくと、頭の上の方にあった太陽が、足元の方に来ていた。

慌てて起きあがった僕は、綺麗な空色のバスタオルがかけてあったのに気がついた。洗濯したてみたいにふわふわの。

誰がかけてくれたんだろうと思って、辺りを見回そうとしたとき。

「あっ、目が覚めたみたいだね。」

急に声をかけられて、驚いて、声のした方を振り向くと、そこに



賢治のまちから
高校生★童話大賞

いたのは、僕と同じ年ぐらいの男の子。

「あ…あのさ…、このバスタオル…。」

「うん、それ、僕のバスタオル。」

そう言って、僕の方に歩いてきた。

「僕はソラ。よろしく、坂井利央君。」

僕は驚いた。名乗ってもいないのに、僕の名前を知っているんだから。

「よ、よろしく…。でも、どうして僕の名前を？」

すると、ソラは笑いながら、ある方向を指差した。その先にあつたのは、僕の通学鞆。

「あの鞆、君のでしょ？名前が書いてあつたから。」

そう言われて思い出した。用事で学校へ行ったときに、担任の先生に、入院しているクラスメートに、宿題を持って行って欲しいと頼まれて、そのまま病院に来たから、制服のまま。名前がわかって当たり前だったんだ。

「僕のことはソラって呼んでよ。だから、君の事、利央って呼んでもいいかい？」

「あ、うん、もちろんだよ。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

と、その時、鞆の中にいれてあった携帯電話が突然鳴り出した。急いで出ると、まだ家に帰っていない僕を心配した、母さんからだった。

病院の屋上にいると答えると、そこで待っていないさいと言われた。父さんも母さんも、この病院で働いている。小児科のドクターで、とっても人気者。

五分もしないうちに、父さんと母さんがやってきた。

「利央、こんなところで何してたんだ？」

「寝てた。気がついたら、ソラがいたんだ。」

そう言うと、父さんは、驚いたような顔をした。

「そうか、天(そら)君、利央と友達になったのか。」

「うん。准哉先生。」

なんだか、ソラが、うれしそうな顔をしている。

「天君、もうすぐ夕食の時間よ。そろそろ帰りなさい。」

「はい、愛里先生。利央、また一緒に遊べる？」

「もちろんだよ。だって、友達だもんな。」

そう言うと、ソラが、すっごくうれしそうな顔をした。

「それじゃあ、またね、利央。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「うん、じゃあね、ソラ。」

そうして、ソラは、階段の方へ走っていった。これが、僕とソラとの出会いだったんだ。

その日の夜、僕は、父さんと母さんから、いろんな事を教えてもらった。

ソラは、青海天(あおみそら)って名前だった事。体が弱くて、ずっと病院に入院している事。僕と同じ、小学三年生だった事。いつも、屋上で一人で遊んでいる事。

父さんも母さんも、天と遊ぶ事には全然反対しなかった。だけど、これだけは守れと言われた事があるんだ。

「いいか、利央、父さんと母さん以外の人には、天君の事を話しては駄目だぞ。それから、人前では、天君と話をしないこと。この二つだけは、絶対に守るんだ。いいな？」

わけがわからなかった。理由を聞いても、「また今度な」としか言ってくれないのだから。

とりあえず僕は、父さんと母さんの言う通り、人前では天の話をしなかった。



僕は、毎日のように病院の屋上へ行つて、天と一緒に、日が暮れるまで遊んでいたんだ。

僕と天は、いろんな話をした。家族の事、自分の事、学校の事。

天は、院内学級に通っているから、学校の話になると、いろんな質問をしてきたんだ。教室の事や、授業の事、運動会や発表会なんかの事。それから、給食の事も。

僕の通っている学校は、名門私立（と一般に言われている）学校だから、どうなのかなあ、と思う事が結構あったんだけど、僕の答えられる範囲のことは、全部話した。

天は、僕の知らない事を知っていたりして、聞いていて全然飽きなかった。僕の方が、教えてもらおう事がたくさんあったような気がするぐらいなもの。

僕も天も、本当に楽しい時間を過ごしていたんだ。

だけど、この楽しい時間に、終わりが近づいている事に、僕は全然気づいていなかったんだ。

楽しい時間が、ずっと続くんだったって、そう信じていた僕にとって、

真実は、あまりにも辛いものだったんだ…。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

八月に入つてすぐの頃、父さんと母さんが、珍しく一緒に帰ってきた。それも、いつもよりもだいぶ早い時間に。

部屋にいた僕のところに、父さんがやってきて、

「利央、出かけるから、制服を着てきなさい。」

と言われて、本当にびっくりした。制服を着て出かけるところなんて、全然思い当たらなかつたから。

言われた通り、制服を着て、リビングで待っていると、父さんと母さんが、黒い服を着てやってきた。

母さんに手を引かれて、僕は、わけもわからないまま、車に乗つて、一緒に出かけていった。

「父さん、母さん、一体、どこに行くの？」

僕が聞いても、二人とも、何も答えてくれなかつた。ずっと無言で、車の外ばかり眺めていた。

やがて、車が、ある家の前で止まった。僕は、初めて来るところだった。

玄関の前に、黒い服を着た人達がたくさんいた。その中には、僕が知っている、お金持ちの家の人も何人かいた。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

玄関に入ると、父さんよりは年上だと思ふ男の人が立っていた。その人の側には、その人の奥さんだと思ふ人、それと、ある私立中学の制服を着た男の子が立っていた。

父さんと母さんが、その人達の方へ歩いていった。もちろん、僕を引っ張って。

「青海(あおみ)さん、お久しぶりです。お元気でしたか。」

青海。どっかで、その名前を聞いたような気がするけど、思い出せない。

「まあ、先生、お久しぶりです。」

「あの時は、本当にお世話になりました。本当に、あの子は良い先生達に出会いましたよ。」

「…早いものですね、もう七回忌ですか…。」

「ええ…。私、いまだにあの子の事が忘れられないんです。あの子の部屋も、ずっと残しているんです…。」

「仕方が無いですよ。私も、あの子の事、忘れられないんですもの。不思議だった。男の子の顔が、誰かに似ているような気がして、すごく気になった。」

と、その時、男の人と僕の目が合った。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「おや、先生、この子はひよつとして…、先生のお子さんですか？」

「ええ、そうです。今、小学三年生なんですよ。」

と、それを聞いた途端に、女の人の目から涙が溢れ出した。男の人も、僕のことを、じっと見つめてくる。

と、男の子が、スツと僕の前に立った。

「…君、なんて名前？」

「…利央。坂井利央です。」

「利央君か…。僕、小学三年のときに、双子の弟が、死んだんだ。六年前の話だけど。」

「…聞いていいですか？弟さんの名前…。」

ふと浮かんだ顔に、男の子がそっくりなのがわかった。だけど、そんなはずは無い、そう思っていたのに…。

「天(そら)だよ。弟の名前は、天って言うんだ。」

信じられなかった。毎日屋上で一緒に話をしていた天が、この男の子の弟だって言うんだ。

「嘘だ…。だって、だって…！」

「利央、本当なんだ。天君は、彼の弟なんだ。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「じゃあ、あいつは誰なんだよ！死んでるんだったら、あいつが見えたり、触れたりできるわけ無いよ！」

だけど、父さんと、母さんの答えは、僕の期待を裏切った。天は死んでいる。そう言われた。

その瞬間、僕は、目の前が真っ暗になった。そして、そこから先の記憶が、全く無くなって、気がついたら、自分のベッドの中だった。

一瞬、夢を見ていたのかと思った。ううん、夢であってほしいと思った。そう願っていた。

だけど、次の日、屋上に行ってみると、そこに天の姿は無かった。一日中待っていたけど、天は、現れなかった…。

その内に、二学期が始まった。入院してたあいつも元気になっていった。僕は、病院にあまり通わなくなった。心のどこかでは、いつも、天のことを考えていた。だけど、天は、僕の前に姿を見せてはくれなかった。

そして、月日は流れて、今日はクリスマス・イヴ。

真夜中近くなって、部屋の窓から外を眺めていた僕は、雪が降り出したのに気がついた。真っ白い雪が、音も立てずに降ってくるの



賢治のまちから
高校生★童話大賞

を見ながら、僕は天のことを思い出していた。

天は、雪みたいに真っ白い肌をしていたなあ、とぼんやり考えていたその時だった。

窓の外に、急に空色の何かが見えた。そして、次に現れたのは…。

「利央！利央、僕だよ！」

なんと、天だった。だけど、確かここって、二階だったような…。

「利央、窓を開けてよ。話があるんだ。」

慌てて窓を開けると、天が、部屋の中に入ってきた。窓を閉めて、

僕の方に向かっていつもの笑顔を見せた。

「お、おい、天、どうやってここに？ここ、二階なんだぞ？」

「簡単だよ。だって僕、空を飛んできたんだから。」

そう言って、天は、クルッと後ろを向いた。その背中には、羽が

…。

「ねえ、利央、ちょっと外に行こうよ。」

「外に？雪降ってんだぞ！」

「大丈夫だって。ほら、早く。」

何が大丈夫なんだ、と思いつつも、天にせかされて、僕は、クロ

ーゼットから、コートとマフラー、手袋を取ってきた。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

僕が着終わるのを待って、天が、窓を開けた。

そして、僕の手をつかんで、窓から飛び出したんだ。

落ちる、普通なら。なのに、僕も天も、宙に浮いていた。信じられない…。

「利央、東京タワーへ行こうよ。夜景がとっても綺麗なんだ。」

「行こうよ、って、どうやって行くんだよ？」

「簡単だよ。飛んでいくんだから。利央も、今なら一人で飛べるよ。」

「飛べるのかよ、本当に…。」

なんせ、僕には羽なんて無い。もちろん、魔法が使えるわけでもない。

「大丈夫。手を離すよ。」

と、天の手が僕から離れた。だけど、慌てたのはほんの一瞬。すぐに、自分が浮いているのがわかった。

「ね？言った通りでしょ。」

そう言って、天は、東京タワーの方へ向かって飛び始めた。慌てて僕も、天を追いかける。

途中で気がついた。全然寒さを感じない事に。雪が降っているの



賢治のまちから
高校生★童話大賞

に、全然寒くないんだ。それに、空を飛べるっていうのが、こんなに楽しいなんて思わなかった。

東京タワーの展望台の上に二人で座って、僕達は、夜景を楽しんでいた。しばらくして、天が、口を開いた。

「利央、ごめんね、今まで黙ってて。僕、ほんとは、もう死んでるんだ。だから、誰にも見えないんだ。」

「ああ、うん……。聞いたよ、いろんな人から……。」

「生まれつき、心臓が弱くって、何度も手術をしたんだ。結局、死んじゃったけど……。」

「……父さんと母さんも、天の主治医だったのか？」

「うん。准哉先生と愛里先生は、僕の最後の先生だったんだ。とっても優しくって、大好きだったんだ、先生たちのこと……。それにね、

先生たちのお陰で、僕、夢が持てたんだ。」

「どんな？」

「いつか元気になったら、猛勉強して、絶対にお医者さんになるんだ、って。それで、僕みたいな難病を抱える子を一人でも多く助けてあげたい、そんな夢。」

それを聞いたとき、僕は、自分の夢ってなんだろうって思った。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

今まで、一度も夢なんて考えた事が無かったような気がした。

天のような、ちゃんとした夢を持っている子が、僕の周りにいるだろうか考えた。でも、きっと、皆は持っているんだろうなって。

何も考えずに生きている僕は、一体何をしているんだろう。本気で考えてしまう。考えさせられてしまう。

「…利央？どうしたの？」

「…うん。僕には夢が無いような気がしてさ…。天みたいに、夢があるって、ほんとうらやましいよ。」

「…だけど、僕は、もう無理なんだ。だって、死んじゃってるから…。お医者さんには、もう、なれないんだ…。」

その時思った。僕が、天の夢を叶えてあげられないかって。

「そうだ…そうだよ…。僕が…。」

「利央？」

「天、その、お前の夢、僕に託してくれないか？」

「利央に…僕の夢を…？」

「うん。僕は、まだこの世界に生きているから。だから、僕なら、天の夢をかなえてあげられる。天の事が見えて、天のことを知っている僕なら、それができるから。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

天が夢をかなえることも無く死んでいった、その事だけが僕の心に強く響いた。

天みたいに、早く死んでしまうかもしれない子供を救えたら。医学が進歩した今なら、父さんや母さんみたいに、優秀なお医者さんになれば、それができるかもしれない。そう思えた。

「利央：だけど、それは…利央の一生を決めちゃうんだよ…。だから…うれしいけど…でも…。」

「僕の父さんと母さんは誰だと思ってるのさ、天。」

そう、天に夢を与えた二人だ。その二人が、僕の両親なんだ。僕の憧れでもある両親みたいになれるのなら、全くかまわない。そう思っていた。

「大丈夫さ。父さんと母さんのような、皆から好かれる医者になれるんだったら、僕、かまわないもん。」

「利央…。ほんとに…ほんとにいいの…。僕の夢を…利央に託しても…。利央に…僕の夢を…。」

「もちろんだよ。だって、僕と天は、友達だもん。」

僕がそう言うと、天は、急に僕の胸に顔をうずめて泣き始めた。

まるで、今まで泣かなかった分を、まとめて泣いてるみたいだった。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

僕は、そんな天を、ただ、見つめるしかなかった。天が泣き止むまで、そっとしておこうと思った。下手に声をかけない方が、いいような気がしたから。

天の涙は、僕が今まで見た涙の中で、一番綺麗な涙だった。どうしてそう思ったかって？簡単さ。

天の涙は、僕の心に、深く染み込んで来た。夢をかなえられなかった悔しさが、僕に夢をたくせるうれしさが伝わってきた。そんな天の涙だから、僕は、一番綺麗だなんて思ったんだ…。

しばらくして、泣き止んだ天と一緒に、東京の空を飛んで、僕は、自分の家に帰ってきた。

窓から部屋に入ると、僕の机の上に、小さな紙袋が二つ置いてあるのに気がついた。一つは、僕の名前が、そして、もう一つには、天の名前が書いてあった。

二人で袋を開けると、中から、それぞれ、僕と天の名前が彫ってあるキーホルダーが出てきた。

そして、僕の袋の中に、小さな紙が入っていた。引っ張り出してみると、それは、父さんと母さんからだった。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「…クリスマスプレゼントです。二人の友情が、ずっと続く事を祈っているよ…。」

僕と天は、思わず顔を見合わせた。そして、誰にも聞かれないように、そっと笑った。

と、天が、いきなり自分の羽を一本抜いた。そして、天のキーホルダーと一緒に、僕の方に差し出したんだ。

「交換しようよ。僕達の、夢の証として。」

「夢の…証…か…。…わかった。天、僕は、絶対に、僕達の夢をかなえて見せるよ。」

そうして、僕達はキーホルダーを交換した。僕達の、夢の証として。いつまでも、お互いを忘れないでいるために。そして、僕と天の、友情の証として…。

あの時から、既に十年がたった。

僕は今、大学生。医学部に入って、医者になるための勉強をしている。

あの時、天と交換したキーホルダーと天の羽は、いつも、僕と一緒にだ。天の代わり、ってわけでもないけど、天と一緒に勉強してい



賢治のまちから
高校生★童話大賞

るんだ、と考えられるから。

あの日以来、僕は、天と会っていない。何度も病院の屋上に行った。だけど、天の姿はどこにも無かった。

天とは会えなくなったけれど、またいつか、僕の目の前にひょっこり現れるって、僕は信じているんだ。

あの時と同じ、小学三年生の天が、いつもの笑顔で、やってくるだろうな、って思っている。友達だから。

いつか、また、会える日が来るって、僕は信じている。だから、その時まで、僕は待つことにしている。いつかきつと、天に会えると信じて。二人の夢を、絶対にかなえてみせると、そう心に誓いながら…。

選考委員コメント

『夢の羽　く僕たちの約束く』

■小野寺悦子



賢治のまちから
高校生★童話大賞

素直な言葉づかいが読みやすく、清潔な雰囲気をよくだしています。こじんまりとまとまってしまった印象もうけますが、冬の夜の飛翔はあざやかでした。

■ 柏葉幸子

文章力もあり、高校生らしいいういしい作品で、好感がもてた。筋立てに甘さもあつたが、主人公の両親のあつかいがユニークで、作者から見た理想の大人？かなとも思えた。読ませていただいた作品中で、一番作者らしさが出ていた。

■ 牛崎敏哉

前半（夏）での、ソラが何者なのかという謎の展開は見事。それに比して後半（冬）はいささか平板とはいえ、この作品の注目は、僕（利央）の両親のあり様ではないでしょうか。大人、家族として、その存在がなんとも魅力的。

■ 澤藤 稔

着想が新鮮である。話の進め方や心理描写が優れており、医師の両



親と主人公の心の温かさが印象的である。しかし、題名にもなっている「(天使の)羽」は、ややリアリティに欠ける。また、前半に比べて、後半の盛り上がり弱い。最後にヤマ場が一つ欲しいところである。